

## ノート Notes

### 腰壁・たれ壁を有する架構の評価法について

横 店 秀 利\*

On the Estimations of Frames with Spandrel-walls

HIDETOSHI YOKOMISE\*

**Synopsis:** A frame with spandrel walls is usually assumed to be a simple structural member. In this paper, the stress, displacements and rigidity of various types of frames according to their opening ratios in which part of spandrel walls are replaced by plane elements members, and beams, columns and steels are replaced by simple structural members, have been examined by the matrix computer method. The results have been compared to general methods in which bending moment, shearing force, rigid zone ( $0.25d$ ) and their reductions are considered, in Standard of Reinforced Concrete of the A.I. J.

**要旨：**従来線材として扱われていた腰壁・たれ壁付架構を、マトリックス法により腰壁・たれ壁部分は平面部材とし柱・梁材及び鉄筋は線部材として取り扱い、開口周辺を変化させた腰壁・たれ壁付架構の応力、変形、剛性について解析する。また、現在行なわれている略算法<sup>2)</sup>及び剛域長さ  $0.25d$ を仮定した曲げ・せん断・剛域考慮による精算法<sup>2)</sup>の計算値と比較検討した考察を述べる。

#### 序

新耐震設計法の施行に伴い建築物に対する設計は一段と細分化され総合的耐震性への配慮が求められるようになった。鉄筋コンクリート構造物においては従来無視されがちな腰壁・たれ壁等の雑壁によっても架構の構造特性は極めて大きな影響を受けるものと考えられている。

かって十勝沖地震、宮城県沖地震の際崩壊した建築物では水平力に抵抗する強靭な耐震壁は少なく、腰壁・たれ壁の影響を軽視した柱の短柱化による被害が多くみられた。現在の新耐震設計法では、腰壁・たれ壁付架構の剛性評価を任意の等価柱材・梁材に縮小した架構として取り扱う略算法と、曲げ・せん断・剛域を考慮し線材に置換した架構として解析する精算法が行なわれている。腰壁・たれ壁等の平面部材が柱・梁材により拘束されている場合、その剛域長さは架構の特性により  $0.25d \sim 0.5d$  ( $d$ : 柱成、梁成) 位に変化することが既往の研究<sup>5)</sup>より報告されているが、不確定な要素が多く、応力、変形に関しても不明瞭で、これらの壁材を含む架構の特性を設計上に反映させる資料は未だ十分とは言えない。

\* 工学部建築学科手  
Technical Asistant, Architectural Division

ここでは壁材、柱・梁材、鉄筋材等を要素剛性マトリックスにおき、それを基に作成されたマトリックス法を用いて開口周比を変化させた腰壁・たれ壁付架構と、無開口壁架構、無壁架構の応力、変形、剛性について解析し、先の等価に縮小された略算法<sup>2)</sup>による計算値、及び曲げ・せん断・剛域を考慮した精算法<sup>2)</sup>による計算値、と比較し検討を加える。

### 解 析 概 要

#### a) 解析に使用するモデル及び載荷荷重

解析には階高 3.6 m、スパン 6 m の腰壁・たれ壁付架構（図1、表1）を使用し壁厚 15 cm、使用される壁筋はタテ・ヨコ D10@150 のシングル配筋とする。

外力は水平力 10t を載荷する。

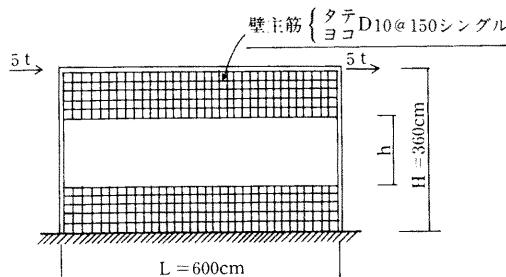


図1 架構のモデル

表1

特 性 モ デ ル	ス パン cm	階 高 cm	開 口 周 比	柱 断 面 B × D cm	梁 成 B × H cm	壁 厚 t cm	壁 主 筋 (mm) タテ・ヨコ D10 @ 150 シングル cm <sup>2</sup>	h cm
モデル 1	600	360	壁なし	65 × 65	35 × 70	—	—	360
モデル 2	"	"	0.82	"	"	15	0.71	240
モデル 3	"	"	0.58	"	"	"	"	120
モデル 4	"	"	0.41	"	"	"	"	60
モデル 5	"	"	0.29	"	"	"	"	30
モデル 6	"	"	無開口	"	"	"	"	0

#### b) 解析の仮定

- (1) 解析は部材を弾性とし、ヤング係数は鉄筋:  $2100^t/cm^2$ 、コンクリート:  $210^t/cm^2$ 、ボアソン比はそれぞれ 0.3 及び 0.167 とする。
- (2) 荷重は静荷重一方向とする。
- (3) 基礎の支持条件は剛とする。

ノート：腰壁・たれ壁を有する架構の評価法について

(4) 鉄筋の付着は完全とする。

### 解 析 法

解析に当っては建築物をモデル化し各々の部材剛性マトリックスを作成する。すなわち架構の柱及び梁材を両端剛な部材とし、鉄筋は両端ピンとした部材に、さらにコンクリート壁材は有限に分割した平面部材にモデル化し、その各々の要素剛性マトリックスから全体剛性マトリックスを作成し、与えられた境界条件の下に消去しその変位成分より各部材の応力を算出する。

腰壁、たれ壁付架構の全体マトリックスは以下の如く表わされる。

$$[\bar{P}] = [AK] \cdot [\bar{u}]$$

ここで  $[\bar{P}]$ : 架構の外力ベクトル

$[AK]$ : 架構の全体剛性マトリックス

$[\bar{u}]$ : 架構の変位ベクトル

なお

$$[AK] = [SK_F] + [SK_S] + [SK_W]$$

ここで  $[SK_F]$ : 柱、梁部材の剛性マトリックス

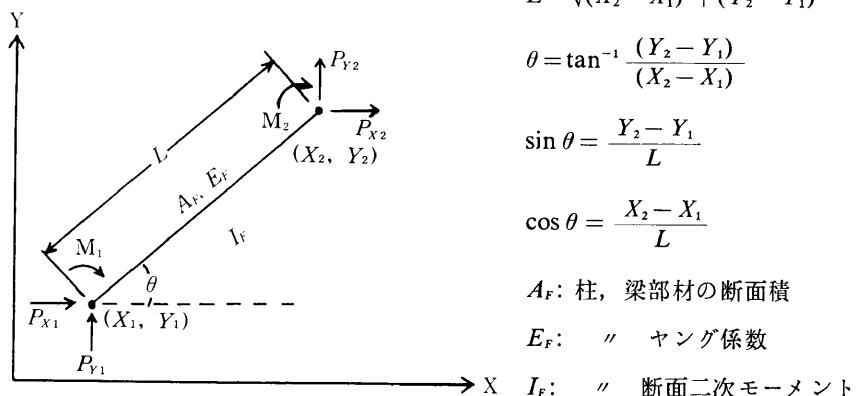
$[SK_S]$ : 鉄筋部材の剛性マトリックス

$[SK_W]$ : 壁部材の剛性マトリックス

さらに各部材の剛性マトリックスを求める。

a) 柱、梁部材の剛性マトリックスの作成

次の仮定で柱、梁部材の剛性マトリックスを作成する。



$P_{x_1}$	$u_1$	$u_1: (X_1, Y_1)$ 座標における X 方向の変位
$P_{y_1}$	$v_1$	$v_1: (X_1, Y_1)$ 座標における Y 方向の変位
$M_1$	$\theta_1$	$\theta_1: (X_1, Y_1)$ 座標における回転角
$P_{x_2}$	$u_2$	$u_2: (X_2, Y_2)$ 座標における X 方向の変位
$P_{y_2}$	$v_2$	$v_2: (X_2, Y_2)$ 座標における Y 方向の変位
$M_2$	$\theta_2$	$\theta_2: (X_2, Y_2)$ 座標における回転角

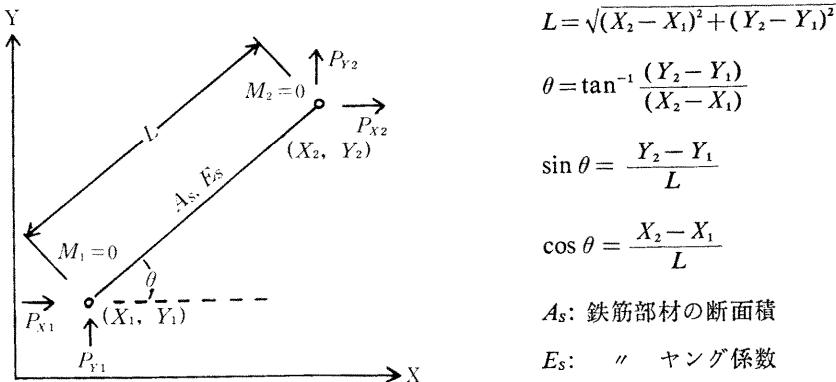
ただし

$$[SK_F] = \begin{vmatrix} \frac{E_F A_F}{L} \cos^2 \theta & \left( \frac{E_F A_F}{L} - \frac{12 E_F I_F}{L^3} \right) & -\frac{E_F A_F}{L} \cos^2 \theta & \left( -\frac{E_F A_F}{L} + \frac{12 E_F I_F}{L^3} \right) & -\frac{6 E_F I_F}{L^2} \sin \theta \\ + \frac{12 E_F I_F}{L^3} \sin^2 \theta & \times \sin \theta \cos \theta & -\frac{6 E_F I_F}{L^2} \sin \theta & \times \sin \theta \cos \theta & \\ \frac{E_F A_F}{L} \sin^2 \theta & \frac{6 E_F I_F}{L^2} \cos \theta & \left( -\frac{E_F A_F}{L} + \frac{12 E_F I_F}{L^3} \right) & -\frac{E_F A_F}{L} \sin^2 \theta & \frac{6 E_F I_F}{L^2} \cos \theta \\ + \frac{12 E_F I_F}{L^3} \times \cos^2 \theta & + \frac{12 E_F I_F}{L^3} \times \cos^2 \theta & \times \sin \theta \cos \theta & -\frac{12 E_F I_F}{L^3} \cos^2 \theta & \\ & & \frac{4 E_F I_F}{L} & \frac{6 E_F I_F}{L^2} \sin \theta & \frac{6 E_F I_F}{L^2} \cos \theta & \frac{2 E_F I_F}{L} \\ & & & \frac{E_F A_F}{L} \cos^2 \theta + & \left( \frac{E_F A_F}{L} - \frac{12 E_F I_F}{L^3} \right) & \frac{6 E_F I_F}{L^2} \sin \theta \\ & & & \frac{12 E_F I_F}{L^3} \sin^2 \theta & \times \sin \theta \cos \theta & \\ & & & \frac{E_F A_F}{L} \sin^2 \theta + & \frac{E_F A_F}{L} \sin^2 \theta + & -\frac{6 E_F I_F}{L^2} \cos \theta \\ & & & \frac{12 E_F I_F}{L^3} \cos^2 \theta & \frac{12 E_F I_F}{L^3} \cos^2 \theta & \frac{4 E_F I_F}{L} \end{vmatrix}$$

対 象

### b) 鉄筋部材の剛性マトリックスの作成

次の仮定で鉄筋部材の剛性マトリックスを作成する。



ノート：腰壁・たれ壁を有する架構の評価法について

$$\begin{bmatrix} P_{x_1} \\ P_{y_1} \\ 0 \\ P_{x_2} \\ P_{y_2} \\ 0 \end{bmatrix} = [SK_s] \begin{bmatrix} u_1 \\ v_1 \\ 0 \\ u_2 \\ v_2 \\ 0 \end{bmatrix}$$

$P_{x_1}$ :  $(X_1, Y_1)$  座標における X 方向の節点力  
 $P_{y_1}$ :  $(X_1, Y_1)$  座標における Y 方向の節点力  
 $P_{x_2}$ :  $(X_2, Y_2)$  座標における X 方向の節点力  
 $P_{y_2}$ :  $(X_2, Y_2)$  座標における Y 方向の節点力

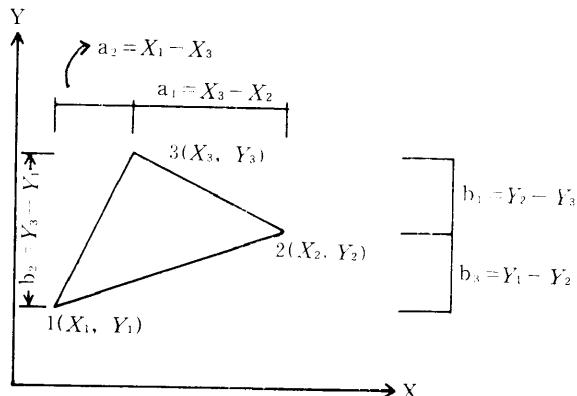
ただし

$$[SK_s] = \begin{bmatrix} \frac{E_s A_s \cos^2 \theta}{L} & \frac{E_s A_s}{L} \sin \theta \cos \theta & 0 & -\frac{E_s A_s \cos^2 \theta}{L} & -\frac{E_s A_s \sin \theta \cos \theta}{L} & 0 \\ \frac{E_s A_s}{L} \sin^2 \theta & 0 & -\frac{E_s A_s \sin \theta \cos \theta}{L} & -\frac{E_s A_s \sin^2 \theta}{L} & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ \frac{E_s A_s \cos^2 \theta}{L} & \frac{E_s A_s \sin \theta \cos \theta}{L} & 0 & \frac{E_s A_s \sin^2 \theta}{L} & 0 & 0 \\ \frac{E_s A_s \sin^2 \theta}{L} & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}$$

対 象

### c) 壁部材の剛性マトリックスの作成

次の仮定で壁部材の剛性マトリックスを作成する。



$$\begin{bmatrix} P_{x_1} \\ P_{y_1} \\ P_{x_2} \\ P_{y_2} \\ P_{x_3} \\ P_{y_3} \end{bmatrix} = [SK_w] \begin{bmatrix} u_1 \\ v_1 \\ u_2 \\ v_2 \\ u_3 \\ v_3 \end{bmatrix}$$

$P_{x_3}$ :  $(X_3, Y_3)$  座標における X 方向の節点力  
 $P_{y_3}$ :  $(X_3, Y_3)$  座標における Y 方向の節点力  
 $u_3$ :  $(X_3, Y_3)$  座標における X 方向の変位  
 $v_3$ :  $(X_3, Y_3)$  座標における Y 方向の変位

ただし

$$[SK_w] = \iiint_V [B]^T [C] [B] dV$$

$$= A \cdot t [B]^T [C] [B]$$

ここで、ひずみ-変位マトリックス

$$[B] = \frac{1}{2A} \begin{bmatrix} b_1 & b_2 & b_3 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & a_1 & a_2 & a_3 \\ a_1 & a_2 & a_3 & b_1 & b_2 & b_3 \end{bmatrix}$$

面積マトリックス

$$A = \begin{bmatrix} 1 & X_1 & Y_1 \\ 1 & X_2 & Y_2 \\ 1 & X_3 & Y_3 \end{bmatrix}$$

応力-ひずみマトリックス

$$[C] = \frac{E_w}{1-\nu^2} \begin{bmatrix} 1 & \nu & 0 \\ \nu & 1 & 0 \\ 0 & 0 & \frac{1-\nu}{2} \end{bmatrix}$$

である。

$E_w$ : 壁部材のヤング係数

$\nu$ : 壁部材のポアソン比

$t$ : 壁部材の厚さ

以上の三角形要素剛性マトリックスより四辺形要素剛性マトリックスを作成する。

任意の四辺形要素を図2とすればその剛性マトリックスは $10 \times 10$ のマトリックス

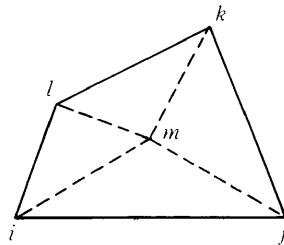


図2

$$\begin{bmatrix} F_{ix} \\ F_{iy} \\ \vdots \\ F_{ix} \\ F_{ir} \\ F_{mx} \\ F_{my} \end{bmatrix} = \underbrace{\begin{bmatrix} k_{iixx} & k_{iixy} & k_{ijxx} & k_{ijxy} & \cdots & k_{imxx} & k_{imxy} \\ k_{iixy} & k_{iyy} & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \\ k_{ijxx} & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \\ k_{ijxy} & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \\ \hline k_{midx} & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & k_{mmxx} & k_{mmxy} \\ k_{midy} & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & k_{mmxy} & k_{mmyy} \end{bmatrix}}_{10} \begin{bmatrix} u_{ix} \\ v_{iy} \\ \vdots \\ u_{ix} \\ u_{ir} \\ u_{mx} \\ v_{my} \end{bmatrix} \quad 10$$

ノート：腰壁・たれ壁を有する架構の評価法について

で表わされる。さらに以上のマトリックスは下記の如き  $8 \times 2$  のマトリックスに分解される。

$$\begin{bmatrix} F_a \\ F_b \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} k_{aa} & k_{ab} \\ k_{ba} & k_{bb} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_a \\ v_b \end{bmatrix}$$

すなわち

$$[F_a] = [k_{aa}] [u_a] + [k_{ab}] [v_b]$$

$$[F_b] = [k_{ba}] [u_a] + [k_{bb}] [v_b]$$

さらに

$$[k_{bb}]^{-1}([F_b] - [k_{ba}] [u_a]) = [v_b]$$

$$([F_a] - [k_{ab}] [k_{bb}]^{-1}[F_b]) = ([k_{aa}] - [k_{ab}] [k_{bb}]^{-1} [k_{ba}]) [u_a]$$

これは

$$[F_a] = [k_{aa}] [u_a]$$

となり三角形要素剛性マトリックスはその節点数を増すことなく、内挿点  $m$  を消去し四辺形要素剛性マトリックスに縮小され、要素分割は精度上、及び使用上からも簡明に表現される。

以上より作成された各々の要素剛性マトリックスをもとに全体剛性マトリックスを作成し、境界条件を考慮し解析に使用する。

## 結 果

a) 図3～図7は壁板の主応力度分布であり、矢印は主応力方向、及び大きさを示している。最大主応力度の位置は何れも開口の隅角部に生じ、開口が大きくなるに従い最大主応力度も大きな値となる。

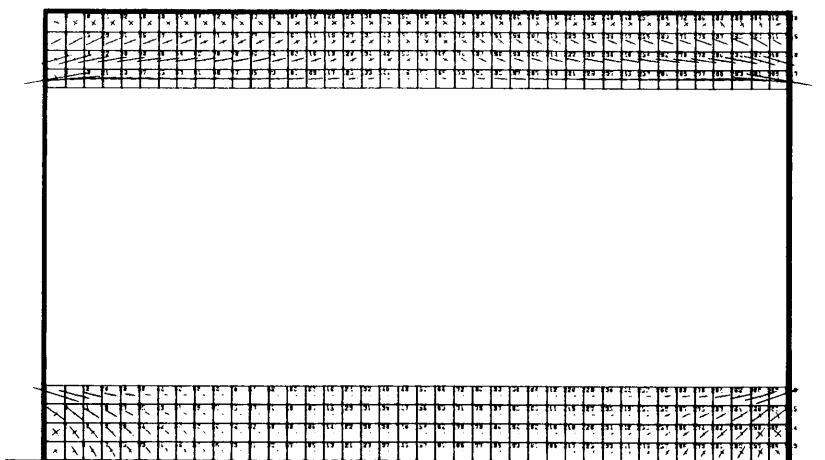


図3 モデル2主応力図（開口周比0.82） 最大主応力度=  $2.236 \times 10^{-2} t/cm^2$

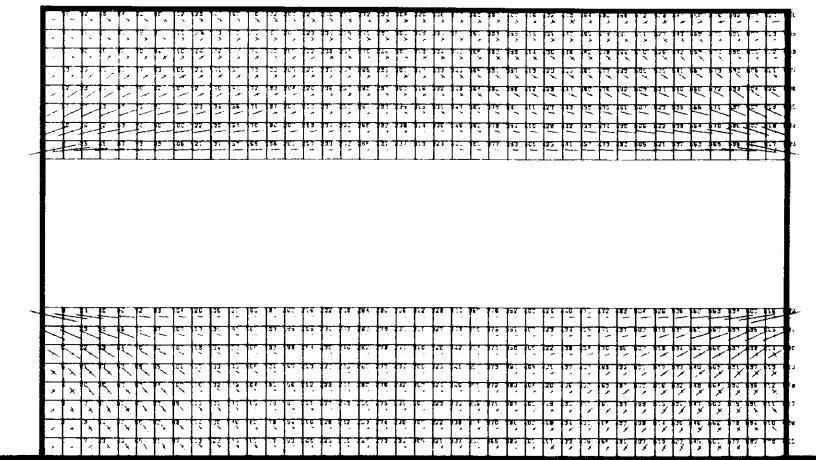


図4 モデル3主応力図（開口周比0.58） 最大主応力度＝ $1.742 \times 10^{-2} t/cm^2$

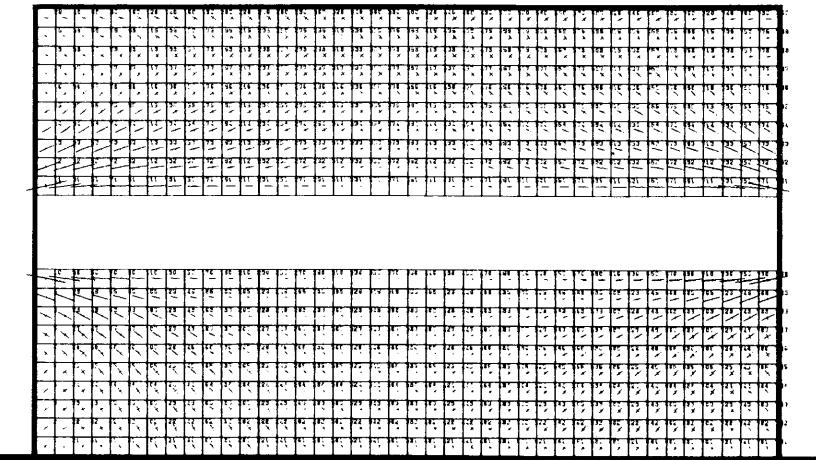


図5 モデル4主応力図（開口周比0.41） 最大主応力度＝ $1.362 \times 10^{-2} t/cm^2$

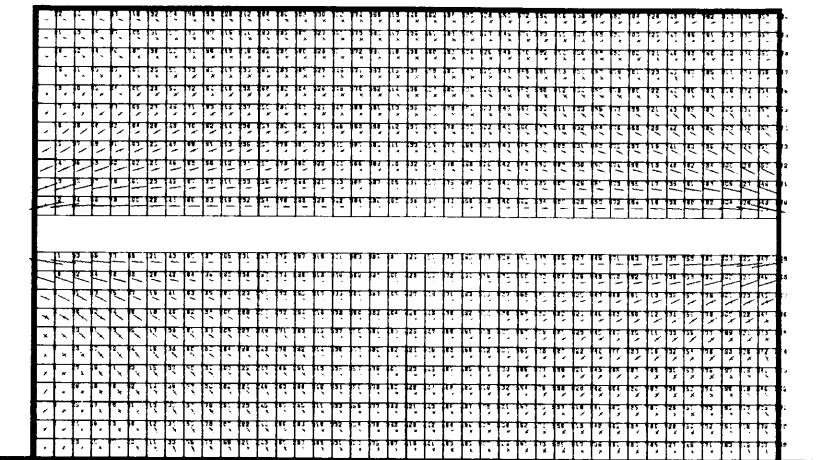


図6 モデル5主応力図（開口周比0.29） 最大主応力度＝ $1.173 \times 10^{-2} t/cm^2$

ノート：腰壁・たれ壁を有する架構の評価法について

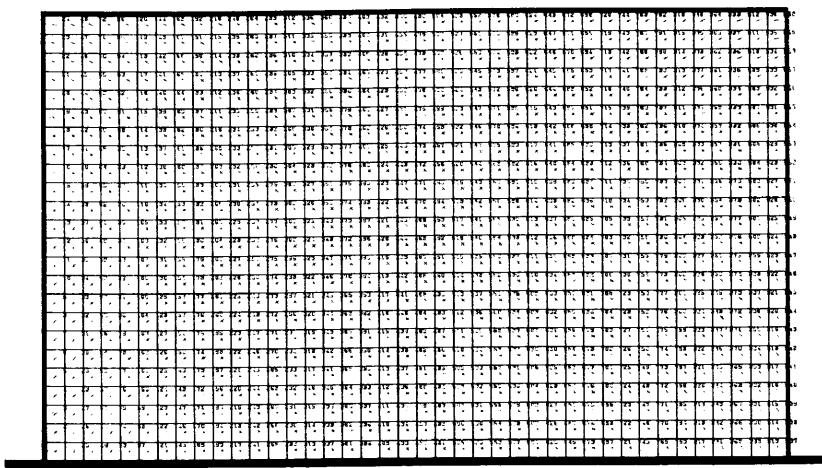


図7 モデル6主応力図（無開口壁） 最大主応力度=  $0.164 \times 10^{-2} t/cm^2$

b) 本解析による 腰壁・たれ壁付架構の 水平変位は図8～図12の如くとなり、柱脚及び 基礎部分を剛と仮定したため、変形及び変位量を拘束しているが、開口が大きくなるに従い変位量は著しく増加する。

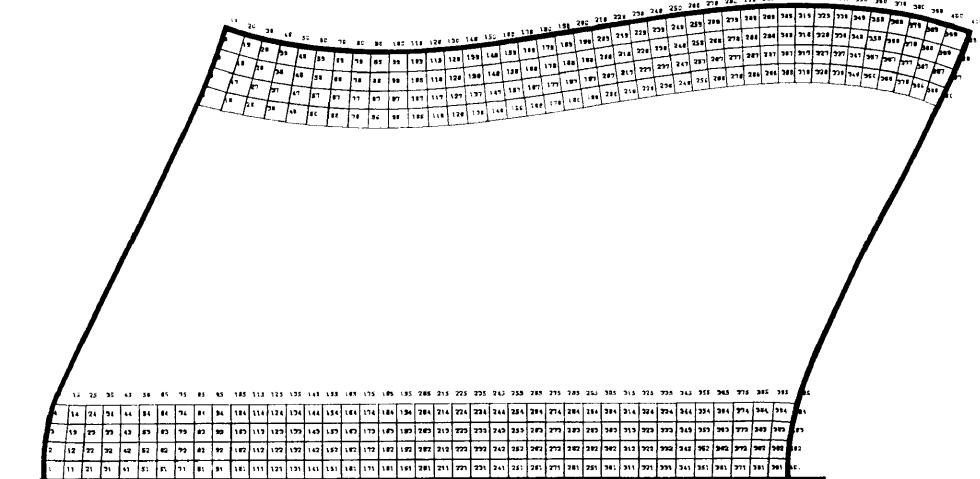


図8 モデル2変位図（開口周比0.82） 水平変位  $u = 8.641 \times 10^{-2} cm$

國立館大學電子計算機センター紀要 第4号

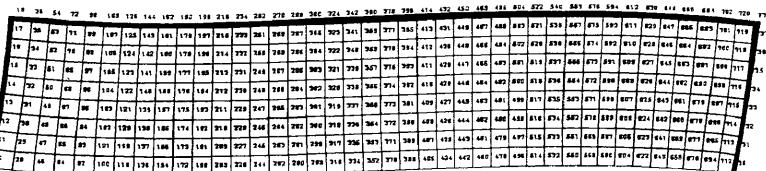


図9 モデル3変位図(開口周比0.58) 水平変位  $u=3.549 \times 10^{-2}$  cm

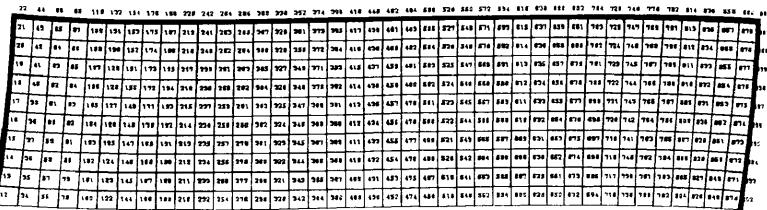


図 10 モデル 4 変位図 (開口周比 0.41) 水平変位  $u = 2.132 \times 10^{-2}$  cm

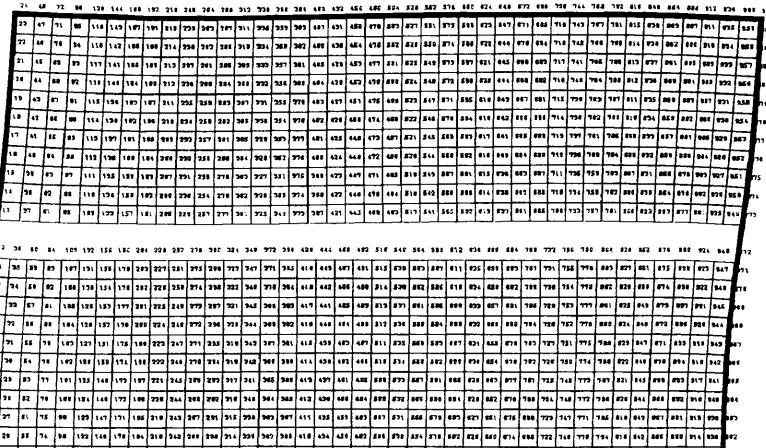


図 11 モデル 5 変位図(開口剛比 0.29) 水平変位  $u = 1.660 \times 10^{-2}$  cm

ノート：腰壁・たれ壁を有する架構の評価法について

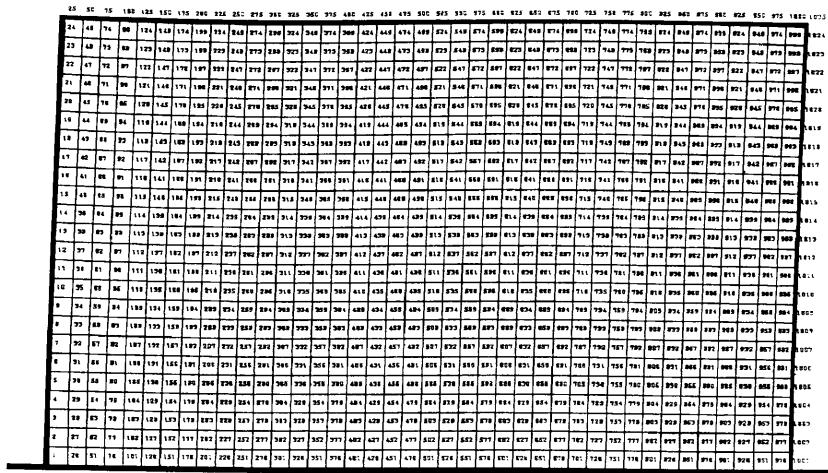
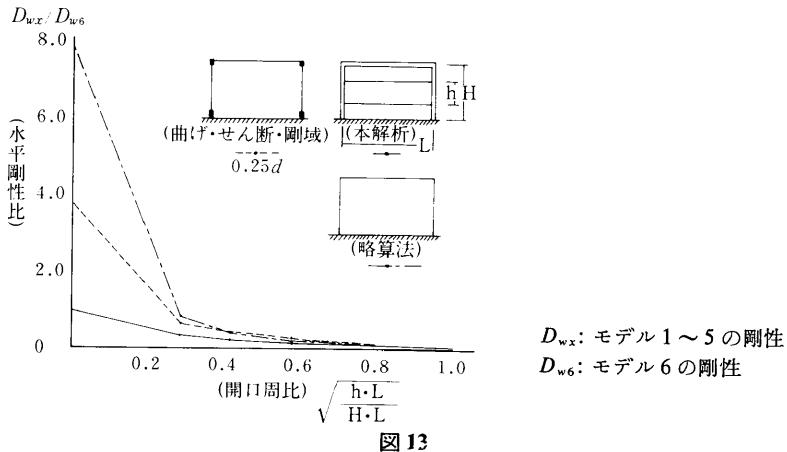


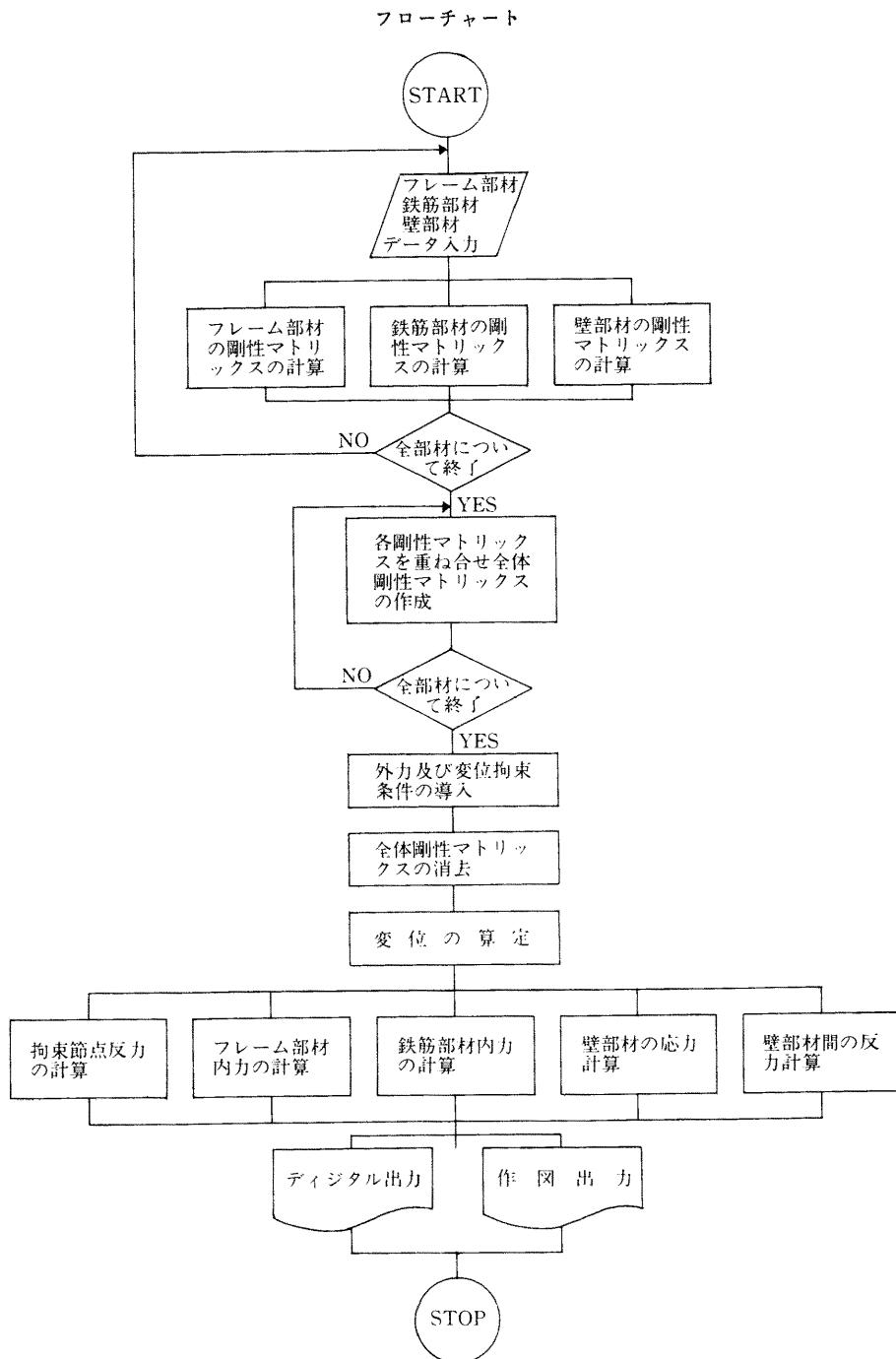
図 12 モデル 6 変位図（無開口壁） 水平変位  $u=0.559 \times 10^{-2} \text{ cm}$

c) 図13は開口周比と剛性の関係を示し、剛性は無開口壁架構に対する各架構の変位量の比で表わしている。これによれば腰壁・たれ壁付架構の剛性は、略算値、剛域を $0.25d$ とした精算値に対して本法の解析値は低い値となるが、開口周比 0.6 以上では他の計算による値とほぼ等しくなる。



### ま と め

以上の解析結果から、開口周比が小さくなると、他の解と較べて差があり、今後この点を解明したい。またここでは基礎部分を剛とした場合であるが、今後一般階での解析をし、解法の充実を計りたい。



ノート：腰壁・たれ壁を有する架構の評価法について

最後に、日頃御指導頂いております國士館大学工学部教授田中輝明先生に対しまして深く感謝いたします。

本解析に当たり東京大学大型計算機センターの HITAC M-280H, 及び國士館大学電子計算機センターの HONEYWELL DPS8/70 を使用した。

(1983年3月10日 受理)

参考文献

- 1) 日本建築学会鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説.
- 2) 改正建築基準法施行令新耐震基準に基づく構造計算指針・同解説 日本建築センター.
- 3) 建築構造物の応力解析 日本建築学会.
- 4) The Finite Element Method in Engineering Science. McGraw Hill Zienkiewicz.
- 5) 武藤 清 耐震設計シリーズ I 耐震設計法 丸善.
- 6) 松井源吾・坪井善隆・今井三雄, 壁式架構の基礎的研究一均等曲げモーメントを受けるときの壁柱接合部の剛域, 日本建築学会大会学術講演梗概集 昭和53年9月.
- 7) 徳広育夫・佐々木昭夫, たれ壁, 腰壁付柱の弾性剛性に関する研究(1), 日本建築学会論文報告集 昭和56年6月.
- 8) 黒正清治, 有限要素による鉄筋コンクリート部材の二次元非線型解析, 日本建築学会論文報告集 昭和46年11月.